

批評及び紹介

シールリッツ氏「明代の文淵閣」

矢澤利彦

Ernst Schieritz: Das Wen-yüan-ko der Mingzeit. Materialien zu einer Geschichte der chinesischen Palastbibliotheken. Monumenta Serica. Vol. III. Fasc. 2. 1938. p. 528—564.

「四庫全書」の所藏を以て名高し清の文淵閣は、乾隆三十九年、高宗が杭州の織造貢著なるものを寧波に派遣し、當時既にその耐火の故を以て名高かつた天一閣の房屋書架の制度を調査せしめ、その報告を受けた後、この天一閣を見本として北京の宮殿内に

築造を行はしめたものであつた。乾隆四十一年同建
物落成するや、帝は明代の宮廷文庫の舊名を踏襲し
てこれに文淵閣なる名稱を與へ、續いて文淵閣の規
模にならつて奉天・熱河・揚州・江口・杭州等の地に文
淵閣・文津閣・文匯閣・文宗閣・文瀾閣の五閣を建築し
た。かくて清の文淵閣の名聲は「四庫全書」の名と共に
高まり、これに關する記述研究の類の世に出づる
ものが鮮くなかつた。最近のものとしては中國營造
學社彙刊第三の四及び第六の二に掲載せられた「故
宮文淵閣樓面修理計劃」（蔡方蔭・劉敦楨・梁思成）・
「清文淵閣實測圖說」（劉敦楨・梁思成）があり、これに
よつて清の文淵閣の構造は著しく明かにされた。然
るに他方清の文淵閣が其の名を受けたところの明の
文淵閣の研究は全然等閑に付され、その存在すら忘

られたるが如き觀があつた。こゝに紹介せんとするエルンスト・シールリッツ氏の⁽²⁾新著「明代の文淵閣」はかゝる缺點を満たし、明の文淵閣の状態・歴史を出來得る限り詳細に描き出さうと試みられたものであつて、尙ほ綿密に史料を蒐集して検討すれば異論や新見解の出で來る餘地がありさうにも思はれるが、從來不明なりし明の文淵閣の歴史を一應明瞭にされたその努力には見るべきものがあるし、又その所論も大體に於いて正鵠を得て居るやうに考へられるので左に同論文の梗概を記することとする。

(A) 「南京の文淵閣」元の至正十六年(一三五六)朱元璋は後の南京の地に都を定め、こゝより討元の軍を派して國內の統一に努めた。洪武元年(一三六八)八月北方に遣はされた大將軍徐達は現在の北京に侵入して元の勢力を逐つたが、彼はその際宮殿内に存して居た圖書の類を差押へて、これを朱元璋が新しく南京に建てつゝあつた文庫の基礎とするために南

京に運んだ。これと前後して全國から書籍を買ひ上げて文庫を完全になすべしと云ふ太祖の諭令が下つた。徐達が北京で發見した圖書と、新たに増加された圖書との全數がどの位であつたかは不明であるし、北京から南京に移された圖書が最初どこに置かれたかも正確には分らない。或書によればこれらの圖書は宮殿内の奉天門から百歩の處にあつた文華堂に運ばれ、皇帝は常にこゝに來られたと云ふことである。洪武三年(一三七〇)には三名の司書官が任命されたが、十年後には解任され、翰林院の學者がこれに當ることとなつた。文淵閣なる名稱は洪武十五年(一三八二)十二月に初めて史に見えて來る。即ちこの月皇帝は宋の舊制に従つて若干の大學生を任命したが、その中に宋納と云ふ者が文淵閣大學士に任ぜられたとあるのがそれである。⁽³⁾併し文淵閣の建物がいかなるものであつたか、それが何時建てられたか、又南京宮殿内の何處にあつたか等のことは不幸にし

て全然知ることが出来ない。永樂四年（一四〇六）の四月になると文淵閣が文庫であると云ふことを知るに足る記録が現はれる。それは永樂帝が學士等に文淵閣には經史子集が完備して居るかと問はれたのに對し、學士が未だ備はらずと答へたので、帝は甚だこれを遺憾として、禮部尙書鄭賜に命じて書を購はしめたと云ふことを傳へて居るからである。これによつて文淵閣が文庫であつたと云ふことが分る外、當時尙ほ藏書の數が餘り多くなかつたことが知れるのである。よつて見るに徐達が南京に運ばしめたと云ふ元の宮廷圖書は恐らくその一部であつたものであらう（元の宮廷圖書は宋金兩朝のそれを收めたものである）。然も未だ藏書の詳細も分つて居らず、目錄も刊行されては居なかつたやうである。文淵閣は圖書館としての他に又別の目的をも有して居た。即ち明初帝命によつて南京に於いて編輯された圖書の校訂者達がこゝを作業處として使用したことがそれ

で、こゝで編纂された書籍の中で最も有名なものが、かの永樂五年（一四〇七）に完成した「永樂大典」である。永樂十九年（一四二二）永樂帝は都を南京から北京に移したが、その時に文淵閣の藏書の一部を北京に移してしまつたので、南京の文淵閣の内容は頗る乏しいものとなつた。正統十四年（一四四九）南京宮城内に大火災が發生し、文淵閣も又その焰に燒かれてしまつた。傳によればこの火事で文淵閣の藏書は悉く灰燼に歸したとのことであるが、それは恐らく眞を傳へたものではあるまい。

(B) 「北京の文淵閣」 一、「藏書の成り立ち」。正統六年（一四四一）から同じく文淵閣なる名稱の下に北京に開かれた文庫の歴史は前者よりもよく分る。これは第一に關係史料の豊富なことに歸因するものであるが、第二には清の學者沈叔埏（一七三六—一八〇三）がこの問題に興味を持ち、史料を蒐集使用して「明文淵閣考」（頤綵堂文集卷三）なるものを書いて居

ることに基くのである。併しこれに關する精密なる研究は未だ世に現はれて居ない。永樂帝は首都を北京に移すや、この地に又宮廷文庫を作らうと考へ、元末に於いて當地に存した元の宮廷文庫の藏書數を恢復せんとして、必要な書籍を民間から購入すると共に、南京文淵閣の藏書の一部をこゝに移した。南京文淵閣の藏書が北京に運ばれた年次については、諸書の記載がまち／＼であつて正確には知られない。而して運ばれた藏書を貯へるために別に一屋が建てられた形跡はなく、左順門の北廊に納められて居たらしい。然るに永樂十九年（一四二一）四月に北京宮殿内に火災が起り、奉天殿・華蓋殿・謹身殿は灰燼に歸した。火勢が奉天門の東廡に接近した時、學士楊榮は三百名の武士を指揮して書籍を東華門外に運び出して災害を脱せしめ、皇帝より恩賞を賜つたと云ふことが傳へられて居り、この時紛亂した書籍を整理するのに二ヶ年の日子を要した。運び出された書

籍の中に果して南京より移された圖書が入つて居たかどうかと云ふことが問題となると思ふが、運び出すに三百名の武士を要したと云ふこと、整理に二ヶ年を費したと云ふことから推して、その中に南京文淵閣よりの圖書が含まれて居たと見るのが妥當であらう。かく見來れば永樂十九年四月以前には少くとも南京文淵閣の藏書の一部は北京に到着して居たと云ふことが言へるのである。永樂十九・二十一年頃、書籍は左順門の北廊に置かれて居た。正統六年（一四四一）皇帝に捧げられた「文淵閣書目」（讀畫齋叢書戊集所收）の題本には南京より北京に運ばれた書籍について「近奉聖旨移貯于文淵閣東閣」と述べられて居る。「書目」の編者達はこの書を皇帝に呈すると共に、「廣運之寶」と云ふ印を藏書に押すことの許しを求めた。正統帝は六月二十六日これを許可されたので、左順門にあつた「書目」記載の書籍は全部押印されたと傳へられて居る。よつて思ふに南京より

運ばれた圖書はこの時まで他處へ移されることがなかつたのであらう。

二、「建物の位置と構造」。彭時の「可齋筆記」には文淵閣は午門内の東寄り、文華殿の前にあり、磚城である⁽⁵⁾と見えて居るが、孫承澤の「春明夢餘錄」には内閣は午門内の東南隅にありとされて居る。これらによれば文淵閣と内閣とは、同じやうな場處にあつたらしいが兩者の關係はどうであるか。他方徐學謨の「世廟識餘錄」を見ると内庫は十間で、西五間は閣員の居る處、これを文淵閣と言ふ、東五間は書庫であると述べられて居る。この内庫が内閣を指すことは疑ひないから、結局文淵閣と云ひ、内閣と云ふものが、同一建物に對する兩様の稱であつたことが推定出来るのである。文淵閣は右の傳への如き位置構造を有して居たが、文庫としては甚だ手狭であつた上に、明り窓が小さかつたので甚だ暗かつた。併しこれらの不便は嘉靖帝によつて取除かれた。帝は文淵閣の眞

中に玉座を据えしめ、同時に並ぶ五間の南壁に窓を作らしめたが、この際書庫としての便を大ならしめるために中二階が東側に造られた。併し乍ら嘉靖年間この建物は火災を蒙り、藏書は多大の損害を受けるに至つた。この火災に關する傳へはまち／＼でその真相を明かにすることは出来ないが、被害の程度が如何に甚大であつたかは、以後の明代の記録に、文淵閣なる名稱が出て來ないことによつても知れるのである。然るに文淵閣は磚城であつたと見えて居り、この種の建物が一回の火災によつて烏有に歸してしまつたとは考へられない。明代の文淵閣の位置に關する所傳が一致して述べて居る宮城内の地點のあたりに現在ある清代の建物は内閣大庫とよばれるもので、西は紅本庫、東は實錄庫、紅本庫の南、宮城壁に近いものは銀庫と稱されて居る。これらの建物の中の一が明の文淵閣の建物と關係があるのではないかと云ふことは既に支那人によつて説かれて居る

(葉鳳毛・「内閣小志」・沈叔埏「明文淵閣考」)。それは恐らく正しい見解であると思はれるが、問題なのは内閣大庫のどの建物と関係があるかと云ふことである。方甦生は銀庫こそそれであると述べて居る(清内閣庫貯書檔輯刊第一)。著者が實地に調査したところによつて見るに、現在の實録庫・紅本庫の位置状態は、明の文淵閣に關する當時の記載と合はないのに反し、銀庫のそれは南側に窓のあることや宮壁に近いことなどから推して文淵閣の位置状態と一致する點が少くなく、方氏の見解は従ふべきものであることが分つた。

三、「藏書と目錄」。「文淵閣書目」は楊士奇等が正統六年に編輯して皇帝に奉呈したものであるが、これは目錄としては多くの缺點が認められるのであつて、唯書名・冊數・完缺等を傳へ、卷數・著者・寫刊等の事については全然記して居ない。「日下舊聞」等によると、文淵閣の藏書は四萬三千二百餘冊、列朝實錄又

數千卷を下らずと云ふことになつて居るが、それは恐らく大體に於いて正しい數であらう。全藏書は千字文のはじめの二十字(天―往)によつて各々分類され、掲載(「書目」に)された書名は全部で七千三百十二書に上つて居るのである。然るに其後藏書は次第に散佚し、更に嘉靖の火災のために徹底的の打撃を蒙つて七割以上のものが失はれてしまつた。かくて萬曆年間再び内閣の藏書を整理して目錄を作らうと云ふ試みが行はれ、その結果世に出されたものが孫能傳等によつて萬曆三十三年(一六〇五)に編纂された「内閣藏書目錄」である。この目錄は先の文淵閣藏書の中で當時尙ほ殘存して居たものと、其後に集獲されたものについて記したもので、この書に於いては著者・刊寫年代・内容・完欠及び寫本であるや否や等に關して記述されて居る。書名の上れるもの二千九百八十六書、これが十七に分類され、總冊數は一萬八千六百六冊である。

四、「藏書の滅失と存遺」。萬曆三十三年（一六〇五）以後に於ける文庫の歴史は不明である。併し其後尙ほ多くの書籍が加へられたことは、内閣大庫整理事業の際に發見された清初に作られたと思はれる二つの手書目録に、「文淵閣書目」並びに「内閣藏書目録」に見えて居ない書籍の名が上つて居ることによつて知ることが出来る。明末清初の兵亂に際して藏書の多くは破損を蒙つたり、盜難に會つたり、他處に運び出されたりしたが、その一部は清朝に引繼がれた。乾隆時代の祕庫所藏貴重圖書目録たる「天祿琳琅書目」及び同「後編」に名の上つて居る圖書は全部で千八十書であるが、その中で「文淵閣印」の押されてあるものが九書、「廣運之寶」の押されてあるものが十五書あつたとなつて居る。其後火災や内閣大庫の側壁崩壞等のためにこれらの内のあるものは、更に滅失したものと思はれる。宣統元年（一九〇九）張之洞は内閣大庫の圖書を新設の官立京師圖書館に移

管するの提議をなし、やがてそれは實行された。京師圖書館は間もなく市立圖書館と合併されて今日の北京圖書館となつた譯であるが、王國維はこの北京圖書館に明の文淵閣の藏書の一部が所藏されて居ると述べ（觀堂集林）、これに對して同圖書館の司書たる趙萬里は文淵閣の所藏印のあるものは現在の同圖書館所藏書には一つもないとして否定して居るが、今次の事變に先立つて多くの貴重書は南方に運ばれてしまつたのであるから、たとへ現在の同圖書館に文淵閣の所藏印のあるものが一部もないとしても王國維の説を全的に覆へすことにはならぬ。

註

(1) シールリッツ氏の著書には他に Die bilischen Darstellungen der indischen Göttertrinität in der älteren ethnographischen Literatur. Hannover. 1927. と云ふものがある。

(2) 謝朓（明初の詩人）の密菴箋と云ふ詩集の戊卷に「洪武十六年冬十有二月朔、以召入、見試經于文淵閣、述事一首」と云ふ前書で「宮壺五點鷄三唱、冠佩如雲列絳霄、黃道六龍行化日、

彫延一席立清朝、象來交趾經登服、馬出流求涉海潮、朝退試文東閣下、筆端五色欲飄颻」なる詩が載せられて居る。洪武十六年であるから、シ氏が文淵閣なる名稱が最初に史に見える年とする洪武十五年より一年後のことになるが、それでも可なり面白い文獻とは言へまいか。「試經」と云ふ語は正確には分らないが宛に角、經書に關する試験であることは疑ひないと思ふ。かく考へれば文淵閣で洪武十六年頃試験を行ふことがあつたと見ることが出来るのである。

(3)

シ氏は「可齋筆記」の文を「日下舊聞」、「内閣小志」等から轉引用して居るやうである。彭時の「筆記」は別に「彭文憲公筆記」と云ふ名で「指海」第九集に載録されて居る。それと「日下舊聞」等に「可齋筆記」の文として引いて居るものと内容を照合して見るに、大體に於いて同一であるが、文字は所々異つて居る。

(4)

「文淵閣書目」の分類法は左の如し。

- (一) 天——國朝。(二) 地——易・書・詩・春秋・周禮・儀禮・禮記。(三) 玄——禮書・樂書・諸經總類。(四) 黃——四書・性理・經濟。(五) 字——史。(六) 宙——史、附史雜。(七) 洪——子書。(八) 荒——子雜。(九) 日——文集。(十) 月——詩詞。(十一) 盈——類書。(十二) 辰——韻書・姓氏。(十三) 辰——法帖・書譜。(十四) 宿——政書・刑書・兵法・算法。(十五) 列——陰陽・醫書・農圃。(十六) 張——道書。(十七) 寒——佛書。(十八) 來——古今志。(十九) 暑——舊志。(二十) 往——新志。

附記

本稿を草するに當つて久野昇一學士の御援助を蒙るところが少くなかつた。附記して謝意を表する次第である。

シールリツツ氏「明代の文淵閣」